

ホワイトヘッドの有機的自然観

—— 連続性と原子性をめぐる実体概念の周辺 ——

大塚 稔

「形而上学とは、生起するあらゆるものの分析に不可欠な関わりをもつ、普遍的な諸観念を発見しようとする科学である⁽¹⁾」

(1)

「生の哲学」という呼称が哲学史的な遺物と化してすでにひさしい。周知のごとく、ホワイトヘッドは「生の哲学」が投げかけた問いをも有意味な問いとして継承し、その哲学を独自の有機体の哲学へと止揚している。すなわち、かれは「生の哲学」が直観を重視するあまり、存在論的傾向を色濃く持つに至った点を是正しようとする。換言すれば、かれは直観と知的認識とを公平に配置し、存在論と認識論とのバランスを維持しつつ、両者の不可分な関わり合いを強調する方向に進む。そして、より普遍的な見地から生命に新たな概念規定を行なって独自の体系を築いた。しかし、時代は既に反形而上学的な物理主義が徐々に浸透しようとする時期にあつて、その余波は現在、非歴史的傾向を帯びた哲学の分化を生むに至っている。そして、そこには最早「生の哲学」の可能性を含めて哲学本来の雄大かつ厳密な思想の芽ばえる余地すら存在しないかに見える。

ホワイ特ヘッドの哲学は、まさにこのような状況下においてこそ一考に値するものと言えよう。なぜなら、かれはロマン主義と物理主義との狭間に位置しつつ、ロマン主義をそのぎりぎりの可能性において開示すると同時に、物理主義の行き着く思弁の閉塞性をいち早く先取して自らの形而上学を構築しようとしたからに他ならない。

本稿では、かれの有機的自然観の一端を実体概念の連続性と原子性の問題に言及しつつ論じることにした。そのさい、論点は実体の存在論的側面に限られる。

(2)

ホワイ特ヘッドもベルグソンと同様、ニュートン力学への批判という形で自説を展開する。すなわち、かれは、デカルトの二元論的認識に端を発し、ニュートン力学によつて完成された二分法的自然観を祖上に乗せる。そして、啓蒙期に至つて一般に機械論的自然観として流布するこの自然観を、「科学的唯物論」(scientific materialism)のもとに総括し、その批判に向う。勿論、この科学的唯物論の内容は、純粹に物理学的な視点から見られる場合には当然ニュートン力学ということになる。しかし、他方、この自然観が哲学的な定式化において捉えられる場合には、それは「実体論」(substantialism)を意味する。従つて、かれ独自の实体概念の吟味に先立つて、まず、その実体概念の第一の内容であるニュートン力学に対するかれの批判を見ておかねばならない。

ホワイ特ヘッドとベルグソンとは、共にニュートン力学への批判を通して、流れを伴う生の躍動のうちに、価値と創造性を読み取る点で根本的な相異はない。しかし、両者には、なお決定的とも言ふべき差異がひとつある。それは、前期量子論と相対性理論に代表される物理学内部の革命的な変化である。ホワイ特ヘッドの場合、この革命の恩恵を少なからず受けて自らの自然観を積極的に築き得た。この点、進化論を主要な論拠としたベルグソンと

は隔世の感がある。しかも、一九世紀末の物理学の状況は、マックスウェルらの電磁場論がニュートン力学の威信を極度に低下させてはいたが、未だ統一ある自然観を根底から崩壊させるには至っていない。それ故、ベルグソンの批判は積極的にそれに代る自然観を樹立する必要性に眼ざめないままなされたものと言える。「生の哲学」が人間の生にのみ固執したその限界性がここにはある。

ホワイトヘッドはベルグソンほどには幸運でもなければ不運でもない。なるほど、前世紀まで続いた統一ある自然観が、量子論と相対性理論の出現によつて完全に瓦解、分裂してしまったことは不運と言わねばならない。しかし、そのことが、かれに新たな自然観への統一を積極的に押し進めるに足る実証的な基盤を供与するに至ったことは、まさしく、幸運と言ふべきであろう。かくて、かれは「生の哲学」をも包括する「有機体の哲学」の建設に向かうが、それは、ミクロな世界とマクロな世界とをオーガニズムの持つ構造的な概念で統一的に処理しようとするものである。以上の点を念頭に置いて、かれの批判を順次整理することにする。まず、科学的唯物論を全体として捉えるために、その定義を見ておこう。かれはこのように述べている。

「この宇宙観 (cosmology) は、図形配置 (configuration: これは物理化学的には、分子内の原子が空間内に占める相対的な位置を示す用語である) が絶えず変動しながら、空間全体に拡がっている原理にまで還元しがたい非情な出来事 (matter) または物質を、根本的な事実として前提している。このような物質は、それ自身としては無感覚、無価値、無目的である。それは、その存在の本質からは生じえない外的関係によつて課せられた一定の軌動をたどつて動くにすぎない。わたしはまさにこのような思想 (assumption) を科学的唯物論と呼ぶのである⁶⁾。」

そして、この科学的唯物論の図式は、ニュートン力学がもたらした無色、無臭、無目的、無価値な物質を基盤とする機械論的自然観を唯一絶対の真理とした点において、誤まった抽象化の上に築かれた観念だとされる。なぜなら、この機械論的自然観はラプラスの悪魔に象徴されるごとく、決定論的自然観と等価な概念であり、それに従えば、素朴

な経験が示唆する生命の指向性やその意味を問うことすら不可能になるからである。要するに、この図式は没価値的な帰納法が適用される範囲内にのみ妥当する真理と言える。かれの言葉をもつていえば、「唯物論思想の全体はたゞきわめて抽象的な存在、すなわち論理的弁別の産物にのみ適用される真理である⁽⁴⁾。」それ故、それは一步その抽象域を出れば最早なんの普遍性もない概念に脱してしまう。かれは、ニュートンの『一般注』（これは第二版に付加されたものではなく、第一章の注解を示している）をその好例として、次のように評している。

『『一般注』がその抽象性を暴露するのは、それが自然界において顯著に見られる、自己産出、発生、ピュシス、能産的自然 (natura naturans) というような観点をなんら供与しないことによつてである。『一般注』にとつては、自然は外から設計されており、それ故従順に、端的かつ完全にそこにあるものとされる⁽⁵⁾。』

ホワイトヘッドにとつて、狭い量見で抽象観念を用いることは大悪以外のなものでもない。まして、電磁場論や量子論および相対性理論の出現がニュートン以来の伝統的な基本概念である、時空や物質等の諸概念の再構成を要求する状況にあつては、それはなおさらのことと言わねばなるまい。

(3)

あらためて付言するまでもないが、ニュートン力学の決定論的自然観は、かれ独自の時空観念とそのうちにあつて運動する物質存在の仮定の上に成り立っている。すなわち、それは絶対時空といわゆる原子論的自然観を形成する物質の第一次性質をもとに築かれた力学体系である。そこで次に、この両概念のうちまず、時空概念を取り挙げてかれが「具体者取り違いの虚偽」(fallacy of misplaced concreteness) と呼ぶ、誤まつてその抽象性を今少し具体的に見ておくことにしよう。

周知のように、絶対時間とはニュートン自身の定義によれば「それ自身で、そのものの本性から、外界のなにものとも関係なく均一に流れ、別名を持統と呼ばれるもの⁽⁶⁾」である。また、絶対空間とは「その本性として、どのような外的事物とも関係なく、常に同じ形状を保ち不変不動のままのもの⁽⁶⁾」と定義されるが、これらは共に幾何学的には、一次元の線型空間と三次元のユークリッド空間を示している。それ故、一樣、連続、無限で普遍かつ同質なのが絶対時間、不変かつ普遍で等方的なのが絶対空間と言えよう。そして、これらは先の定義からも知られるように、外界や外的事物とは全く無関係であると同時に、自らも相互に独立した関係にあり、各々「事件の容器」と「空虚な容器」を形成している⁽⁶⁾。ホワイトヘッドはこの種の絶対主義的な時空論を誤った抽象化のひとつと考える。従って、基本的にはニュートンの時空論に限れば、絶対時空の概念を捨てて、「感覚で捉えられる対象についての関係から以外では考えられない」とされる相対時空の概念を採ろうとするわけである。もちろん、その根拠の一端はニュートン力学を包括する一般相対性理論の時空概念にある。その理論によれば、時空は四次元連続体とみなされ、外界での出来事の関わりをこそ、時空の出現する場であるとされる。すなわち、物質（出来事）の存在のしかたによって、時空の性質が決められる。星の光が太陽の傍を通過する際に屈折するのは、その典型的な例証であろう。

ところで、時空のこれらの特性をホワイトヘッド自身の言葉で表現すれば次のようになる⁽⁶⁾。すなわち「事物は空間によって分離されまた時間によって分離される」という意味では「分離的」(separative)であり、「空間において共存し、たとえ同時的でなくとも時間において共存する」という意味では、「把握的」(prehensive)であり、また「すべて時空内にある事物は特定の形および場所、期間に限定される」という意味では、「様態的」(modal)なものと言われる。そして、これらの三様の定義は各々まったく両立不可能とも思える量子論的、相対論的、ニュートンの時空概念に対応するものだが、かれの時空概念の特徴は、連続性の母体ともなる「外延的連続体」とその拡がりを分有する形での原子性とを、四次元的な「持統」の概念で包括しようとするところにある。もちろん、時空のこれらの

諸特性が出来事間の関わりを抽象したところに築かれていることは言うまでもない。かれはこのことを踏まえつつ、先の諸定義を独自の「把握的特性」を支柱とする観点から、このように総括する。

「空間および時間は、これらもうものの把握 (prehension: 後に感取 \wedge feeling \vee に吸収される認識論と存在論とを根本において支える概念である) のたがいにつながり合った諸関係の一般図式を表わす。われわれはどのひとつの把握をもその全体的連関からひき離すことはできない。しかもその各々は、いずれもその全体的な連関の中で、複合体全体のもつ実在をことごとく有する⁽⁹⁾。」

かくて、時間は拡がりのない点の集合としての一次元的な線型空間から拡がりをもなったホワイトヘッド独自の原子論をも考慮した「持続」(duration) の概念に吸収される。かれによれば「持続」とは「部分的出来事の複合体であり、感覚的意識にあらわれる本質的要因としての同時性によって限定された自然の厚板 (slab) にほかならない。従って、同時に空間概念も空虚な三次元的空間から内容のある充実した空間概念に移行することは多言を要さないだろう。

現在とは、過去と未来とになんの関連もなく寸断された抽象的な瞬間ではない。それは過去と未来を包み込む厚みを持った持続と言ふべきものである。すなわち、原子論的決定論的自然観での物質の運動は、その物質のある時刻点における位置と運動量によって一義的に決定されるが、ホワイトヘッドはその際に位置限定される物質の瞬間的現在(單純定位)を誤まてる抽象と呼ぶ。なぜなら、それはその限りににおいて過去も未来も内に含まない全くの抽象化の産物だからである。かれにとり科学的唯物論は、「自然を拡がりのない瞬間的時間の一次元的な継起的系列と捉える理論に外ならない⁽¹⁰⁾。」そして、かれはその自然観の端的な反証を生命の有機的構造に求めてこう述べる。

「生物学での有機体という概念は瞬間における物質分布によっては表現され得ない。有機体の本質はそれが機能するところのあるものであり、かつ空間に拡がりを持っているということである。ところで機能するには時間を要す

る。従つて、生物学的有機体はその存在の本質ともいえる時空延長を有する単位である⁽⁴⁾。」

かくて、ニュートンの決定論的原子論的自然観に加えて、目的論的外延的自然観の足場ともなる概念がここに時空論のレベルで確立されることになる。また、デカルト以来主客分離の実体概念によって二分されてきた「自然の二分法理論」(Theories of bifurcation of nature) も同時に放棄される。なぜなら、自然とはひとつの過程であり、それは、それぞれの出来事が各々のパースペクティブのもとに関連し合つた、原子的でもあると同時に連続的な有機的過程と呼ぶべきものだからである。「創造的展開は自然の基本的特性であるが、伝統的概念はその推移なき自然を把握しようとする試み⁽⁵⁾」であつたとかれは言う。

(4)

科学的唯物論の図式には先述したように、ニュートンの自然観とデカルトの二元論に象徴される実体論とが含まれている。ニュートンの自然観に対する時空論レベルでの批判については、既に粗雑ながらこれまでその一端は示している。そこで、次に物質観の問題を取り挙げねばならないが、ここではそれをあらためて実体論との関わりで言及する。すなわち、かれ独自の思索を捉える意味で、実体論を物質観の変化に並置させ、かれの自然哲学期での「出来事」(event)と「対象」(object) 概念を要約する。そして最後に、かれの造語である「現実的存在」の概念をこれらの概念から敷衍する形で整理し、連続性と原子性との最後の結論を見ることにしたい。

ホワイトヘッドはニュートンの自然観から派生する誤まつた物質観を、「単純定位」(simple location) という独自の概念で規定する。すなわち、

「一個の物質が単に位置を占めるということは、その一個の物質のもろもろの時空間関係が、空間の他の領域および

時間の他の期間に対してもつ本質的連関を離れて、その物質は存在するところに存在することを意味している⁹⁰。」と。また、この独立自存する物質存在の概念は伝統的な実体概念の物理学的帰結でもある。その伝統的な実体概念とは言うまでもなく、アリストテレスに端を発しデカルトにおいて完全なる近代の様相のもとに定式化された実体概念を示している。かれらによれば、実体とは、「もはや他のいかなる基体（主語）の述語ともなりえない窮極の基体（個物）であり、これと指し示されうる存在でかつ離れて存しうるもの⁹¹」であり、「存在するためには他のいかなるものをも必要としない存在⁹²」と定義される。しかし、これらの実体概念が多少の問題はあるにせよ、基本的には物質の独立せる実体性を仮定しているものとすれば、その極限状況を形成するデカルト的二元論は、「具体者取り違いの虚偽」を犯していることになる。なぜならそれは、精神と物体との中間に存する、生命、オーガニズム、機能、交互作用、自然の秩序等の端的な事実と見なされる諸概念をまったく説明しえないからである⁹³。ホワイトヘッドにとり独立自存する存在など思弁の抽象ではない。

「唯物論の出発点は独立して存在する二つの実体、すなわち物質と精神にある……。有機体説の出発点は互いに絡み合った組織内に配置されたもう一つの出来事の自己実現（realization）の過程を分析することにある⁹⁴。」したがって、この意味では、一元論として抽象の謗を免れるものではない。

ところで、かれのこの種の有機体的自然観は、「單純定位」の観念を誤った抽象化と批判することによって築かれるが、この自然観にはおおよそ三つの思想的背景がある。ひとつは、プラトンの『ティマイオス』の自然観、他のひとつは、英国ロマン派詩人達——ワーズワース、シェリー、キーツ、テニスン等——のものした詩篇の世界および「生の哲学」、そして第三のものとしては、マックスウェルによつて決定的な一歩が画される物理学内部での物質観そのものの变化を挙げることができる。そこで以上の諸点のうち、さしあたって必要な問題として第三の点について、次に簡略に見ておくことにする。

時代を画する自然観を通俗的に約言すれば、一九世紀中庸までのニュートンの自然観は「物」的自然観であり、マックスウェルやアインシュタインらの場の自然観は「事」的自然観と言える。換言すれば、それは、静的一義的な瞬間性をのみ捉えようとする自然観から、動的多義的な有機的ともみなされる関係性を把握する自然観への移行を意味している。すなわち、質量がエネルギーに変換可能な概念とされたことで、最早、独立自存の旧来の物質観が素朴に維持しえなくなつたわけである。なぜなら、原子論では到底考えられなかった真空における電磁場の存在は、真空そのものに拡がる「場」の概念を不可欠なものとするに至つたからである。しかし、連続的で有機的な相互関係のうちに自然観の統一をかううじて支えていた一九世紀の様相は、光の放射が非連続的なエネルギーの束で放出されるとするプランクの「量子飛躍」の仮説において分裂を強いられることになる。一方、アインシュタインは電磁場を重力場に還元した一般相対性理論を呈示して、新たな連続的有機的な自然観を樹立するに至るが、以後のいわゆる前期量子論の時代は光の二元性をめぐる論争に典型的な動乱期を形成している。

ホワイトヘッドは物理学におけるこの時代の二元論的状况を的確に捉えて、分裂した自然観に独自の解釈を施すべく自らの思索を展開した。すなわち、自然界の連続性と原子性等の純粹に物理学的な対立概念を、飽くまでも形而下的な問題として齊合的に解釈しようとした。それが自然哲学期（一九一四～一九二三）と称されるかれの時代である。

(5)

周知のように、この期を特徴づける概念と言えば、「場」の概念に等値な「出来事」(events)と物体の概念を一部具現する「対象理論」(theory of objects)を挙げることができる。すなわち、それらは、知覚的経験の主題である

全体乃至経験という所与呈示 (presentation) の全体を一定の存在の複合体に分解することによって (かれはこの過程を「自然の細分化」〈diversification of nature〉と呼んでいる) 顕現する概念である⁸⁰。「出来事」とは、推移するが変化せず、部分であると同時に全体でもある物性 (thinghood) に欠けた存在で、いわば外在性と延長とを特性として持つものと言える。他方、「対象」は、旧来の物質観をある意味で継承してはいるが、それから場所 (固定性) の概念と時空的意味での部分の概念を取り除いたものと約言できる。なぜなら、「時空は出来事から抽象されるが、対象はその出来事に対する関係によって、ただ派生的に時空内に存する⁸¹」からである。この意味では、旧来の物質観に依拠する対象が「ある時間にある場所にのみありうるもの」とされるのは、他ならぬ出来事の特性和いうことになる。かれは、意識の単位としての対象を部分としての出来事と截然と区別しようとはするが、實際上、空間的部分に関してはそれが不明瞭になるとも述べている⁸²。そこで、変化の概念に限定してあらためてそれらの特性を挙げれば次のようになる。出来事はあるがままの、まさに関係づけられるがままのもので、それ以外の何ものでもない。従って、それは推移こそすれ決して変化はしないと言える。一方対象の変化とは、同一対象の出来事に対する関係づけを意味している。もちろん、時空に欠けている対象が永久的なことは言うまでもない。それ故、その変化はただ時空において、推移しつつある様々な出来事に対するその関係の多様性にすぎないことになる⁸³。

これらの記述からも知られるように、「対象」と「出来事」とは不可分な関係にあり、各々、出来事間および出来事と対象間の関係づけにおいて、その実相を尽くすものと言える。そして、これらの関係を通常知覚される物体をも包括する観点から更に付言すれば、両者はそれぞれ、出来事が何であるかは対象が何であるかによって決定され、その逆もまた真として成り立つ関係にある⁸⁴。従って、この関係を出来事を中心に表現すれば、対象が出来事へ「侵入」 (ingression) することによって、その出来事の性質が形成されるわけである。かくて、ホワイトヘッドにとっての自然とは、「出来事のなかへの対象の侵入がなければ、いかなる出来事も、また、いかなる対象も存在しないところの

もの⁸⁴⁾」と結論づけられる。加えて、このかれ独自の「侵入」という概念は、時空論レベルでの「持続」の概念がそうであったように、物質観のレベルで、閉塞的な因果律一辺倒な自然観を是正し、同時に、目的論的構想の足場を後の形而上学に供与するものとなっている。

しかし、この期のかれの思索は未だ完全には物理学が投げかけた二元論的状况を脱してはいない。「自然の連続性は出来事において見い出され、自然の原子性は対象に存する⁸⁵⁾」というかれの言葉は、それを端的に物語っている。なるほど、両者が一体となつて一つの過程を形成し、具体的な事物を含むあらゆる形態を構成するとは述べているが、実的要因を出来事と対象の二元論にとどめている以上、やはり時の物理学的自然観の呪縛から抜け切れていないと言いたい。

(6)

ホワイトヘッドが用語を統一して「有機体の哲学」乃至「過程の哲学」と命名する一元論的多元論の世界観を呈示するのは、一九二九年に公刊された名著『過程と実在』(Process and Reality)においてである。これは著者自らもその序文で述べているように、数学原理の時期、自然哲学期および『科学と近代世界』(Science and the modern World)に代表される初期形而上学期とを含む年来の思索を、「想像的合理化」(imaginative rationalization)の方法によって独自の形而上学的立場のもとに集大成したものである。換言すれば、かれはこの著作において、物理学的自然観をもそのいち特殊例として包括する雄大な形而上学的体系を目論んでいると言える。そして、ここに旧来の靜的一義的な主語―述語形式に縛られた実体概念に取って代わるべく持ち出される概念が、いわゆる「現実的存在」(actual entity)と称されるものに他ならない。

ところで、この概念が呈示される思想的背景とその基本的特性については、間接的にはあるが、これまでの言及で既におおよそのところは尽くされている。すなわち、科学的唯物論批判と「出来事」および「対象」の概念がそれである。しかし、言うまでもないが、ここで統一的な概念規定のもとに体系の要とされるこの「現実的存在」は、決して単にそれらの概念を継承するにすぎぬものではない。それはなによりも、かれ独自の抽象的一般化によって仮定された、現実界での事実を説明しうる形而上学的概念でなければならぬ。その意味では、いち特殊例の域を出ない物理学での量子や生物学上の細胞理論の概念をも、それは包括し超越する概念と言える。かれの言葉をもってこれを表現すれば、

「現実的存在とは、世界を構成する實在物 (real thing : この thing という言葉は通常の意味での「もの」を示す概念ではなく、「対象」の概念に相等するものである) であり、より真実なる何かをその背後に求めようとしても求め得ぬものである⁸⁰。」
と言うことができる。

さて、以上の点をとりあえず指摘しておいて次に、この「現実的存在」の概念に関わる三つの原理——「存在論的原理」(Ontological Principle)、「相対性の原理」(Principle of Relativity) および「過程の原理」(Principle of Process) をその時空概念と意味について要約することにした。時空概念からそれらの原理を約言すれば、「存在論的原理」とは、なによりも現実的存在のみが時空を具現する単位 (units) であることを示している。そして、「相対性の原理」とは、諸々の現実的存在が一つの継起 (succession) を形成することを意味し、「過程の原理」とは、一つの現実的存在が諸々の現実的存在の時空的な連続性 (sequence) を自らのうちに統合することを示している。換言すれば、「存在論的原理」は時空を現実的存在の内部に据え、「相対性の原理」はその持続を諸々の現実的存在の連続性において取り計い「過程の原理」はその連続性を一つの現実的存在に集めるものと言える⁸¹。また、これらの原理をそ

の意味について要約すればこのようになる。すなわち、「存在論的原理」とは、現実的存在がなければいかなる理由もありえず (No actual entity, then no reason) 、その限りでは、現実的存在のみが世界の究極的な根拠 (reason) を形成するものであることを示している。「相対性の原理」とは、あるひとつの「存在」(being) はあらゆる「生成」(becoming) への「定まった可能性」(potentiality) を持つてゐることを意味している。従つて、この原理によれば「存在」とは、決してそのみが独立してはありえず、つねに他の存在との関連性のうちにあるものと言える。つまり、存在とは他の存在の中に現在すること (being present in another entity) によつてのみ、その本性を尽くすものである。かれはこれを存在の「客体化」(objectification) と呼ぶ。それ故、この原理と先の「存在論的原理」とは不可分な関係にあることになる。そして、「現実的存在がいかに生成するかが、その存在が何であるかを構成する」⁸⁴⁾ とされるのが「過程の原理」である。すなわちこの原理によれば存在は生成にはかならず、両者は各々独立しては記述しえないものとされる。かくて、これら三様の原理は三巴の様相を呈して實在の「説明のカテゴリー」を形成する。

さて、以上の諸原理をあらためて現実的存在の概念から捉え直せばどのようなになるか、まず、旧来の物質観に根ざした靜的一義的な実体概念が放棄される。現実的存在とは、一つの過程であり、現実界から抽象される限りについて物体 (stuff) とは称せ得ないものである⁸⁵⁾。そして更に、変化を生みはするが自らは決して変化しない (unchanging subject of change) とつれた実体 (主体) 概念が、「自己超越的主体」(subject-superject) という自己消滅をも遂げる有機的な動的過程の概念に置き換えられる。もちろん、かれの体系においても主体という概念は存在するが、それはただ、形式上区分される二つの過程の接点にのみ「満足」(satisfaction) という独特な状態で存在するにすぎない。すなわち、主体がその一つの過程である内的、遺伝的 (genetic) な自己形成 (self-formation) の過程 (= 具体化の過程 : Process of Concrecence) を荷ふ当の主体として、「満足」⁸⁶⁾ とつて自己実現 (self-realization) の状態

にある時にのみ、いわゆる存在としての主体はあると言える。しかし同時に、その存在としての主体はその時点で消滅し、外的関係的に他の現実的存在のあらたな与件となるべく「客体化の過程」(Process of Objectification)に組み込まれる(相対性の原理)。そして存在は生成に転化して主体は「客体的不滅性」(objective immortality)と呼ばれる状態を得る(過程の原理)。要するに現実的存在とは、「自己実現の主体であると同時に、自己実現される超越的主体⁸⁴⁾」に他ならない。この意味で、現実的存在は常に「自己超越的」でなければならないとされるのである。

ところで、現実的存在は一方では内적および外的な二様の過程を具現する概念と言えなくもないが、他方、これらの過程が不可分な関わり合いのもとに一つの過程を構成する以上、そこにはただ唯一の過程があることになる。これを現実的存在の分析という観点から捉えるところになる。

「現実的存在の分析はただ知的にのみ可能であるにすぎない。更に広義に言えば、それは客体化されたものとしてのみ可能である。すなわち、各々の現実的存在は原子的統一をもった細胞ではあるが、分析においてはただひとつの過程として、推移しつづけるものとしてのみ理解され、感取される。従って、現実的存在は分割可能(divisible)ではあるが、実際には分割されえない(undivided)ものと言える⁸⁵⁾。」

ここに、自然哲学期以来の自然の連続性と原子性との問題は、「出来事」と「対象」概念を経て原子的な現実的存在の織りなす一つの過程の概念に集約されることになる。「現実界(actual world)とは一つの過程であり、その過程は現実的存在の生成に他ならない⁸⁶⁾」そして、この過程の概念を根本において支える概念が、デカルトの延長概念や自然哲学期での「持続」の概念に相等する「外延的連続体」(extensive continuum)と呼ばれるものである。これは、「世界の全過程を貫くあらゆる可能な観点の連帯性」を意味し、「世界に先立つ事実ではなく、世界そのものの普遍的な特性から生じる秩序―真なる可能性―の最初の限定⁸⁷⁾」と定義される。従って、この連続体と現実的存在との関係は、「連続体は各々の現実的存在の中であらわとなり、各々の現実的存在は連続体を原子化すると同時に、そ

の連続体に遍在する⁸¹」という形に約言できる。

かくして、「相対性の原理」と「過程の原理」とに象徴される自然の連続性と原子性の概念は、存在が生成と化すことで永生を得るといふ、形而上学的な概念規定のもとに、両者の不可分な有機的関連性を強調する「過程の哲学」へと体系化されるに至る。

「避けがたい流れのなかにあっても、とどまる何かがあり、抗しがたい永続さの中にあっても流れへと逃げ込む要素がある。永続さは流れの中からのみ握り取られるものである。すなわち、過ぎ行く瞬間は永続さへの服従によってのみその充実な強度を見つけることができる。そして、これら二つの要素を引き離して捉えようとする者は、明白な事実を何ひとつ解釈できないこととなる⁸²。」

有機的自然観とは、定向進化の原理をもとに森羅万象をその関係性と過程において見ようとするものであり、換言すれば、それは存在一般を生成消滅を繰り返す流動停止の装いに捉える階層的自然観と言える。そして、この信念を合理的に裏付ける究極的な概念が、これまで素描してきた「現実的存在」に他ならない。

「哲学者は合理主義者である。かれらは原理にまで還元し難き頑固な事実の背後を探ろうと努めている。すなわち、万物の流動に入り来る種々な出来事 (various details) の相互関係を普遍的原理に照らして説明したいと望んでいる⁸³。」

とはホワイトヘッドの言葉であるが、生命科学が単なる技術論に墮し、哲学の分化がとどまるところを知らない現在、帰納的形而上学のぎりぎりの可能性を示してみせたかれの哲学には学ぶべきことが多い。しかも、尽きせぬ想像力を我々に喚起するという意味において、それはまさに現代の『ティマイオス』とも称すべき魅力を持っている。本稿ではわずかにその一端を示し得たにすぎない。

- (1) RM (Religion in the Making: Meridian Book) p. 82.
- (2) SMW (Science and The Modern World: Fontana Books) p. 30.
- (3) ibid, p. 100.
- (4) PR (Process and Reality, corrected ed Free Press) p. 93.
- (5) “Philosophiae Naturalis Principia Mathematica”, Scholium 1 『リールン』 (世界の名著) p. 65 註解(1)
- (6) ibid, Scholium 2
- (7) 『空証と時間論の物理学』 p. 22. シー・イン・マン著、水戸巖訳。加速度の絶対性はリールンによつて絶対運動が存在するこゝろで「ただなこいつ 絶対空証と絶対時間の存在の確証として考えられた」。
- (8) SMW p. 82.
- (9) ibid, p. 91.
- (10) CN (Concept of Nature: Cambridge Univ Press) p. 53.
- (11) ibid, p. 71.
- (12) PNK (An Enquiry Concerning The Principles of Natural knowledge: Cambridge Univ. Pres) 『自然認識の諸原理』 藤川孝義訳 p. 10.
- (13) ibid, p. 18.
- (14) SMW p. 75.
- (15) “Aristoteloys Ta Meta ta Physika”, 『形而上学』 出鱈訳 p. 176 (岩波文庫)
- (16) “Philosophes Adam & Tannery” p. 47 『科学の原理』 (世界の名著) 井上庄七 水野和久 訳 p. 354.
- (17) SMW p. 75.
- (18) ibid, p. 183.
- (19) PNK p. 53.
- (20) ibid, p. 57.
- (21) ibid, p. 58.
- (22) 科学の特性は PNK p. 56. 空証と時間の存在の確証。

- (23) CNP p. 144
- (24) *ibid.*, p. 144~p. 145.
- (25) PNK p. 58.
- (26) PR p. 18.
- (27) 以上の論点はロビンソンの著書『The Epochal Nature of Process in Whitehead's Metaphysics』SUNY p. 68~p. 69 の論旨を一部転記している。
- (28) 「生成」の定義を参考として挙げておく。
- (1) Becoming is the transformation of incoherence into coherence PR p. 25.
(生成は混沌を統合く変形するものである)
- (2) Becoming is a creative advance into novelty PR p. 28.
(生成は新しいものへの創造的前進である)
- (29) potentiality は「様に定義される。
- (1) 単なる可能性 (Possibility) の束、これは一般的な potentiality を示す。
- (2) 真なる可能性 (real potentiality) 』これは現実界に与つて供与される所与の条件づけられつゝ (Conditioned) であるを示す。
- この二つは意味を考慮して(2)の概念を言いあつたために「定めた可能性」と訳出した。
- (30) PR p. 50.
- (31) *ibid.*, p. 23.
- (32) *ibid.*, p. 41.
- (33) *ibid.*, p. 85. satisfaction とつたの言及例
(満足は意識である)
- (1) No actual entity can be conscious of its own satisfaction
- (2) The 'satisfaction' of an entity can only be discussed in terms of the usefulness of that entity
(満足はその有用性によつてのみ論議される)

- (34) ibid, p. 222.
- (35) ibid, p. 227.
- (36) ibid, p. 22.
- (37) ibid, p. 66.
- (38) ibid, p. 67.
- (39) ibid, p. 338.
- (40) SMW, p. 170.